

梁蔭全気功師による東京—北京間の 遠距離気功水実験

(人体科学第5巻第1号掲載)

平成8年5月

佐々木 茂 美	(日本工業技術振興協会)	劉 慧 宜	(中国人体科学研究院)
劉 易 成	(中国人体科学研究院)	胡 風 霞	(中国人体科学研究院)
梁 蔭 全	(梁気功センター)		

人 体 科 学 会

Society for Mind-Body Science

梁蔭全気功師による東京—北京間の 遠距離気功水実験

佐々木 茂 美* (日本工業技術振興協会)
劉 慧 宜 (中国人体科学研究院)
劉 易 成 (中国人体科学研究院)
胡 風 霞 (中国人体科学研究院)
梁 蔭 全 (梁気功センター)

The Experimental Research of "Long Distance Qi" from Tokyo to Beijing City Given by Qi-gong Master LIANG YINQUAN

Shigemi SASAKI (Japan Technology Transfer Association)

Huiyi LIU, Yicheng LIU, Fengxia HU (The Chinese Academy of Somatic Science)

Yinquan LIANG (LIANG Qi-gong Center)

The measurement of "Long Distance Qi" from Tokyo to Beijing city given by Qi-gong master LIANG YINQUAN using the method of measuring water's electric conductivity is reported for the first time in this paper. It is demonstrated that amount and characters of "Qi" received in Beijing city is dependent on the oxidation-reduction potential (ORP) and the electric conductivity (S) of the distilled water. The lower is the water's ORP, the

more is the "Qi" received in water. Furthermore, Beijing city running water or underground water, the electric conductivity of which is higher than $1000 \mu\text{s. cm}^{-1}$, and it is difficult to receive the "Qi".

Key words: "LONG Distance Qi", Electric conductivity method, Oxidation-reduction potential (ORP)

I はしがき

気またはサイの科学的な性質究明の一部として、功能者が発する気と体外の物体(水)との間の距離の影響(PK)を調べる。人間と人間との間の超感覚的な情報伝達、つまりESPとして知られているテレパシー等の場合には、距離

の影響を調べた最近の報告もある^{1)~4)}。しかし、念力(PK)の場合には、距離の影響、特に遠距離の影響を調べた実験結果の報告は、放射性物質の場合⁵⁾のみで、其れ以外には殆ど見あたらない様に思われる。今回、本研究で取りあげる事柄は、(1)2,000 km以上離れた場合(北京—東京間)に置いてある水を、意念の作用によって、変化させることが可能であるかどうか。(2)此の時、どのような種類の水に気が作用しやすいか、と言う事を調べる。そのために酸化還元電位(ORP)を変えた水、並びに電気伝導率(S)を

*〒193 八王子市川口町 1769-2
生命現象研究所西東京分室
電話 0426-54-6636

変えた水を用いる事にした。

この試みは、気またはサイの科学的な性質究明の為の目的だけに留まらないで、実用的には遠隔治療の可否、及び雨雲の制御(天候の制御)の可否の論議の一助になると思われる。

II 実験方法

(2-1) 気功師・実験場所・実験者

気功師の名前は梁蔭全、32歳(男)、中国広東省仏山市出身。現在の居住場所は日本の東京都で、中野区中央5丁目3番地11にある梁気功センターから送念する事にした。

送念を受ける場所並びに水測定の実験場所は同一で、中華人民共和国、北京市海淀区西三環北路105号、首都師範大学附属中学校事務部棟、2F 212号(人体科学研究院実験室)である。梁は、今までにこの実験室に行った事が無かった。つまり全く未知の場所に対して送念する事にしてある。

水測定の実験者は、胡風霞と張金霞の2名(女性)であり、何れも気功師では無いし、気制御の能力も無く、普通人である。実験計画、指導並びに総括者は、劉易成、劉慧宜、佐々木茂美の3名で、いずれも大学の教授である。実験者の胡、張、並びに2名の指導者の劉は中国人で、北京市に住んでおり、梁とは過去から現在にいたる迄、全く面識が無かった。佐々木は日本人で、実験日並びに現在も東京に住んでおり、梁とは面識があり、何時も連絡し合っている。

(2-2) 使用した水並びに器具類

何れも北京市の人体科学研究院で用意したものであり、梁はそれらを見たこともないし、また触れた事もない。首都師範大学製の蒸留水(1回の蒸留)、大学の水道水ならびに大学の井戸水を使用する。つまり、梁は、行った事のない場所で、逢った事のない人達が用意してある見た事の無い水にたいして送念する。そして、その水に対して、逢った事のない人達が用意した装置を用いて、それらの人達が測定する事になる。

北京の水に対して、電気的な方法を用いて酸化還元電位(ORP)の異なる水を作る。此の時

に使用した早川式浄水器の機構⁶⁾を略述する。アースしたステンレス製の容器中の水の中に2枚の電極(片方がMg板、他方がZn板)を立て、その中に送念用の水を入れる。水中に僅かのイオンを造るために少量の岩石(ミネラル含有)と酢酸を入れる。水に浸した電極を30kHzの周波数で(+),(-)に変化させると、水中にミネラルが溶け込み、そのミネラルは、その分子の周りに電子をより多く含んだイオンの状態に変化し、結果として水のORPが減少する事になる。

使用した器具は北京唱平北方瑠璃庁製の100CC硝子瓶、蓋付き。北京衛生科学機器庁製の恒温槽、HHS-21型(約40度Cで使用)。上海電磁機器製の電導率測定器、DDS-11AT型。横河電機製PHメータ、PH-82(PH電極、ORP電極付き)である。

(2-3) 実験の手順

送念日と送念時間を、送念日の7日以前に東京と北京間でFAXで連絡しあい、予め決めておく。通常は月曜日の7:00—7:30(北京時間、午前)である。これとは別に、送念時の目印用として、普通の白い紙に黒色のボールペンで梁が自分で手書きしたアルファベットの文字、A、B、C、Dの中のB(大きき約10—20mm)約50字を、航空便で予め送っておく。北京の実験者は、これを1文字ずつ鋏みで切り取り、セロテープで100CCの硝子瓶に張りつけておく。瓶に張りつけたものを例えば“有B”張りつけて無いものを“無B”と呼ぶ。

梁蔭全による東京から北京への送念の期間は、95年1月12日から95年10月13日迄の9ヶ月間である。その間に、予備実験を含めると、1月12日(略して1/12)、1/16、6/12、7/10、7/17、7/24、7/31、10/13、合計8回の送念をおこなった。つまり、気功師梁は、東京都の中野区の自宅から北京市の実験室内の蓋付きの硝子瓶の中の水に向けて送念して、気功水をつくる。この時、実験室の中には誰も居ない。送念された瓶は、蓋付きのまま鍵の掛かる木製の戸棚の中に、鍵をかけて室温で放置しておき、翌日の8:00—約17:00の間に1日に約12本ずつ、

恒温水槽（約 40 度 C）内で、気功水（送念水 S_u ）と対照水（非送念水 S_c ）を、合計 24 本、1 時間置きに水の電導率 S を測定する。翌日も、次の日も、送念した瓶が無くなる迄、同様に測定する。

III 実験結果の表示

蓋付きの 100 CC の硝子瓶に入れられた水は、蓋付きの儘室温にて送念を受けた後、室温内で放置する。翌日、約 40 度 C における電導率（ S_t ）の変化を、時間経過で測定する。説明用の図 1 において、縦軸の S_t は送念を受けた水（気功水）の電導率、 S_c は対照水の電導率、横軸は 40 度 C における経過時間 t で、通常は 8—10 時間をとっている。気功水（ S_t ）並びに対照水（ S_c ）の電導率の変化率を(1)、(2)式で表示する。

$$W_t = \frac{S_{tmax} - S_{tmin}}{S_{ti}} \dots\dots\dots(1)$$

$$W_c = \frac{S_{cmax} - S_{cmin}}{S_{ci}} \dots\dots\dots(2)$$

但し、 S_{ti} 、 S_{ci} は、各々の初期値。 S_{tmax} 、 S_{cmax} は最大値。 S_{tmin} 、 S_{cmin} は最小値を示す。 $S_{ti} = S_{ci}$ の場合には、直接 W_c と比(3)式で変化率 Q_t が求まる。

$$Q_t = \frac{W_t}{W_c} \dots\dots\dots(3)$$

本報の場合は、一般に $S_{ci} < S_{ti}$ となっているので、図 2 の補正曲線をもちいて、 S_{ci} を S_{ti} に移行させた（補正した）時の W_{cc} で Q_{tc} 変化を(4)式から求める。つまり図 2 の補正曲線は、図 1 と同一のテストにおいて、 S_{ci} を種々に変えて W_c を求めた結果から得られた実験点⁷⁾ の平均値を示している。今回の実験結果として、例えば A (W_c , S_{ci}) と C (W_t , S_{ti}) が求まっていたとする。補正曲線に平行に引いた AB 曲線にそって A の S_{ci} を B の S_{ti} まで移行（補正）させた時の W_{cc} から Q_{tc} を求める。

$$Q_{tc} = \frac{W_t}{W_{cc}} \dots\dots\dots(4)$$

IV 実験結果ならびに検討

(4-1) 酸化還元電位並びに電導率の影響

遠隔の発功実験において、意念の働き（送念）のみによって、水に気が入るか否か。どの様な

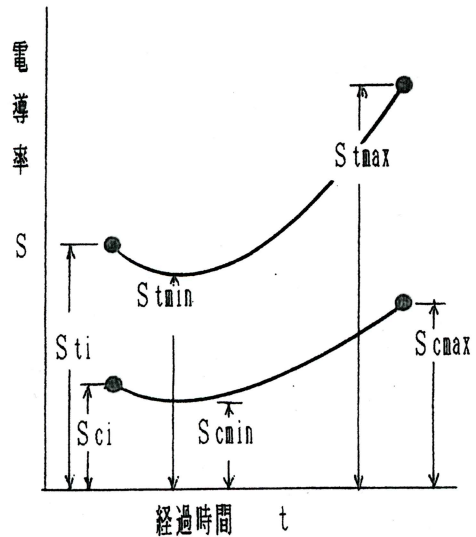


Fig. 1 Schematic electronic conductivity of test and contrast water during elapsed time.

図 1 気功水と対照水の電導率の変化傾向の説明図。

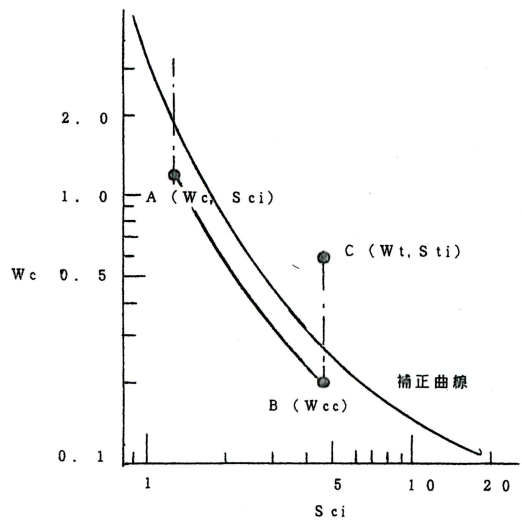


Fig. 2 Revised curve of W_c .
図 2 W_c に対する補正曲線。

種類の水に気が入りやすいか等を調べる為に、実験を行い、結果として図 3 と 4 を得た。

図 3 を見る。蒸留水に対して、早川式浄水器を用いて、酸化還元電位（ORP）を 3 種類に変えた水を造ったところ、結果として測定前の初期電導率 $S_{ti} = 1.0 - 5.3 \mu S/cm$ がえられた。こ

の3種類の水を蓋付 100 cc の硝子瓶 10 本に入れ、内 1 本は“無 B” 残りの 9 本は“有 B”として、東京から北京に発功し送念して貰い、その結果として出来た気功水の電導率変化を調べたのが図 3 である。図 3 の縦軸の $Q_{tc}=1.0$ は、対照と比較して、変化が無かった事、 $Q_{tc}>1.0$ は気が注入されている事、を示している。結果は 10 本とも、何れも $Q_{tc}>1.0$ なので、遠隔発功によって影響を受け、水は気功水になっている事がわかる。ばらつきはあるが、平均値として引いた実線で見ると、ほぼ ORP が低い場合に Q_{tc} は大になる傾向がある。さらに 1 本の“無 B” は 9 本の“有 B” よりも大であるという結果が得られている。

図 4 は井戸水と水道水にたいして、水を採取した儘の状態で、人工的な加工を加えないで、結果を得た場合のものである。ORP の影響を纏めて示した後述の図 7 を見ると、ORP は 150 mV 以上ではほぼ飽和してしまい、ORP の大小の影響が無くなるので、図 4 のデータは (ORP > 150 mV) に在るので、図 4 は電導率 S_t の影響を調べた事になる。初期電導率 S_u をみると、図 3 は $S_u=1.0-5.3 \mu\text{s}/\text{cm}$ であるのに対し、図 4 の井戸水の場合は $S_u=1.19-1.38 \text{ ms}/\text{cm}$ 、水道水の場合は $S_u=0.99-1.27 \text{ ms}/\text{cm}$ であるので、図 4 は図 3 よりも約 1,000 倍も S_u が大である事が判る。なお図 4 の実験方法は図 3 と同一である。つまり ORP の異なる水に対して、各々 4 本ずつ実験を行っている。内 3 本が“無 B”、内 1 本が“有 B”となっている。実験結果を見ると、“有 B”、“無 B”に関係なく Q_{tc} はほぼ 1 よりも小さな値であり、24 本中 3 本のみが 1 よりも大きな値であった。つまりこの場合には、 S_u の大きな水には気が注入出来難く、わずかに 24 本中 3 本 (約 13 パーセント) のみが、気功水になる事が判る。以上の実験から、

- (1) 東京-北京間の実験結果から、遠隔気功 (PK) 水実験が可能であることがわかった。
- (2) 蒸留水で、ORP の低い場合に気が入り易いことが判った。そこで更にこの(1)、(2)にたいして統計的な評価の出来るテストを行う事にする。

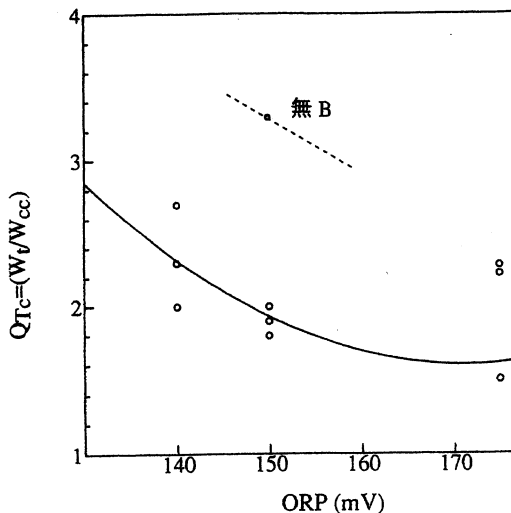


Fig. 3 The oxidation-reduction potential dependence of Q_{tc} for distilled water.
 図 3 気功水の電導率変化 Q_{tc} の酸化還元電位依存性。

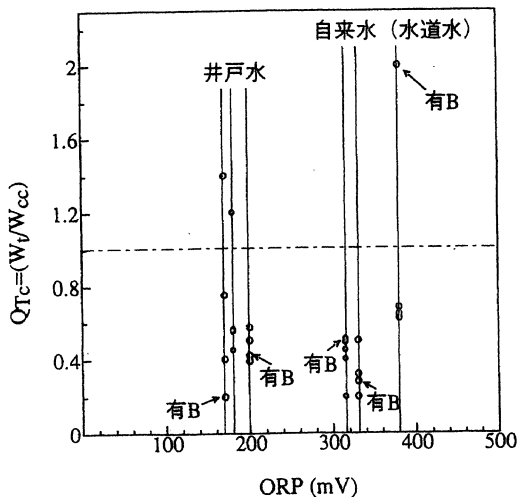


Fig. 4 The oxidation-reduction potential dependence of Q_{tc} for Beijing city running water and underground water.
 図 4 北京の井戸水と水道水の電導率変化 Q_{tc} の酸化還元電位依存性。

(4-2) 遠隔気功水の統計的な性質

早川式浄水器を用いて製造した、3種類の水の ORP 値をもつ蒸留水に対して、各々“無 B” 30 本、“有 B” 3 本、合計 99 本のテストをおこなった結果を図 5 と 6 に示した。図において、実験

結果を正規分布とした時の μ =平均値、 σ =標準偏差で、 σ はデータのばらつきを示している。図において、縦軸は正規分布の累積度数 $\Phi(x)$ を意味しており、横軸には Q_{tc} をとってこれに対応する $\Phi(x)$ の値を正規分布表から求めて縦軸の目盛りにしてある。横軸は式(4)の Q_{tc} で、 $x=Q_{tc}$ である。つまり実験点が正規分布

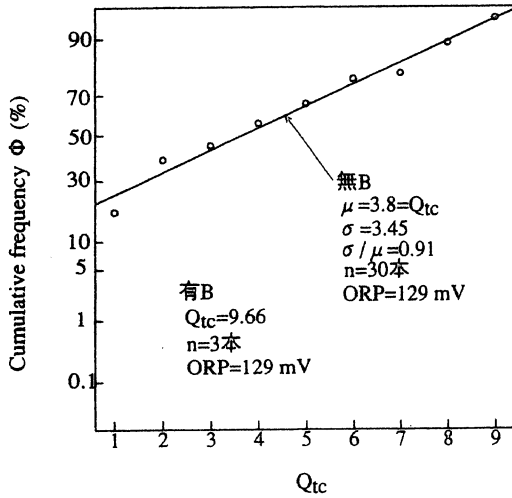


Fig. 5 Normal distribution of Q_{tc} (ORP=129 mV).

図5 電導率変化 Q_{tc} の正規分布表示 (ORP=129 mV)。

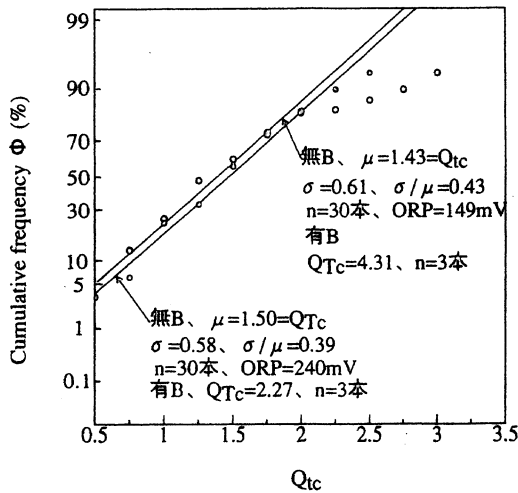


Fig. 6 Normal distribution of Q_{tc} (ORP=149 mV, 240 mV).

図6 電導率変化 Q_{tc} の正規分布表示 (ORP=149 mV、240 mV)。

を示す場合には、実験点は直線で結ばれ、その平均値は μ 、直線の勾配(σ)はばらつきを示している事になる (正規確率紙表示)。

$$\Phi(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma} \int_{-\infty}^x \exp\left[-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma^2}\right] dx \dots\dots(5)$$

但し $X=Q_{tc}$ 、結果をみると、

(1) 図5と6とも、実験点は $\mu \pm \sigma$ の範囲内では、ほぼ直線で表示出来る。つまり16—84%範囲

内の実験点はほぼ正規分布に従っている事が判る。

(2) $\Phi(x)$ をみると、 $\Phi(x)=16$ パーセント以上では、ほぼ $Q_{tc} > 1.0$ となっている。従って前述と同様、遠隔送念によって気功水が生成してい

Table 1 Normal statistical result of Q_{tc} for distilled water.

表1 蒸留水の電導率変化の統計的な性質 (正規分布表示)。

μ (Q_{tc})	3.8	1.4	1.5
σ (Q_{tc})	3.45	0.61	0.58
σ/μ	0.91	0.44	0.39
本数 (n)	30	30	30
ORP (mV)	129	149	240

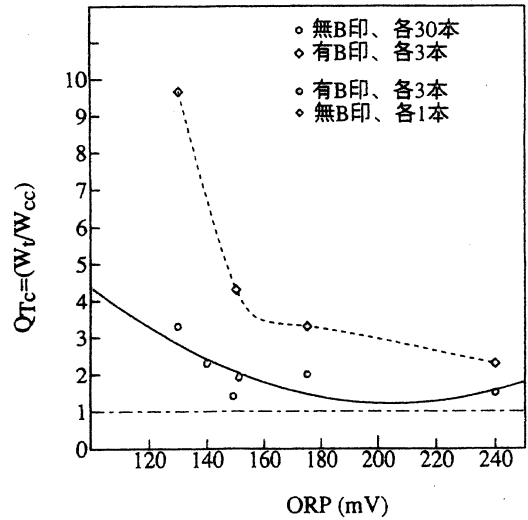


Fig. 7 The oxidation-reduction potential dependence of average Q_{tc} .

図7 平均値で表示した電導率変化 Q_{tc} の酸化還元電位依存性。

る事が判る。つまり蒸留水の場合には、遠隔送念が成功している。

(3) “有 B”と“無 B”の差を、30本及び3本の Q_{ic} の平均値で見ると、何れの場合も (“有 B” 3本) > (“無 B” 30本) となっている。つまり実験点としての瓶の本数の少ない場合の Q_{ic} がより大となる傾向がある。

(4) ばらつきの程度を (σ/μ)で見ると、表1に示したように平均値が大のときに (σ/μ) もほぼ大になる傾向がある。

以上の実験結果を纏めると図7が得られる。横軸は酸化還元電位(ORP)、縦軸は電導率の変化 (Q_{ic}) であり、表示してある実験点は各々の組の実験点の平均値を意味している。B印を貼り付けた組(有B印の瓶)と、B印を貼り付けない組(無B印の瓶)を比較すると、

(5) B印の有無には関係しないで、実験点の数の少ない組の方が(図の点線)、数の多い組(図の実線)よりも、電導率変化 (Q_{ic}) は大であった。

“有B印”というのは、“この瓶に送念して気功水にして下さい”と依頼したものであり、“無B印”というのは、“これは対照なので気功水にはしないで下さい”と依頼したものであった。つまり、ターゲットの数の多い組(実線)と数の少ない組(点線)を並べて置いてテストした場合には、指定または注文(有B、無B)とは無関係に、数の少ない組のほうに意念が集中して、より強い効果(気功水)が得られるものと推定される。

V むすび

東京から北京へ送念する事によって、気功水を生成させる事が出来るかどうか。つまり遠隔PKの可能性を調べる為の実験を行なった実験結果から、次の結果をえた。

(1) 水の電気電導率をセンサーにして実験したところ、条件さえ選べば、遠隔気功水を生成させる事が可能であろう。この時の本実験の気功師は梁蔭全、男、32歳、広東省出身、東京住である。

(2) 蒸留水で、しかも酸化還元電位の低い場合

に、気が注入され易い傾向がある。

(3) 電気電導率が蒸留水の約1,000倍も大きい値をもつ北京の水道水並びに井戸水に対しては、気が注入され難い傾向がある(不成功)。しかし、実験点の13パーセント程度の割合での可能性はある(成功する)。

(4) 対照水と気功水との比較を、各々の電導率の時間変化の変化勾配の比で表示したところ、蒸留水の場合に、各30本(各100cc入り)の平均値で、対照水の1.4-3.8倍と言う結果が得られている。

謝 辞

本報は、日本と中国の人体科学に関する共同研究の一部として実施された。計画当初から論文作製に至るまで、種々の面でご配慮戴いた中国側の人体科学研究院(責任者、陳信教授)並びに日本側の社団法人(通産省認可)日本工業技術振興協会の関係者の皆様方に対し、衷心より厚くお礼申しあげる。

参考文献

- 1) 候書礼その他4名: The Repeating Studying Results of Zhao Ying Artition Wall Fluorescope、中国人体科学、Vol. 1、No. 3、PP. 109-114、1991.
- 2) 盛祖嘉: 特異功能和人体科学、ibid. Vol. 2、No. 1、PP. 4-6、1992.
- 3) 郭来経その他3名: Experimental Studies of “Thought Transference”、ibid. Vol. 2、No. 1、pp. 7-11、1992.
- 4) 王伯揚その他5名: Study on the screen Effect in Parapsychological Transference of Message、ibid. Vol. 2、No. 1、pp. 12-14、1992.
- 5) 嚴新、陸祖陰その他3名: The Effect of the Emitted Qi on the Decay Counting Rate of ^{241}Am Radioactivity、気功科学文集 2(胡、呉、編)、pp. 1-14、1989.
- 6) 早川英雄、還元水でがんに克つ、央輝出版、pp. 66-71、1994.
- 7) 佐々木茂美、その他: 未発表の実験結果、
(受付 1996年1月12日)